

「シャボン玉先生の石けん講座」に参加して…

編集部：工藤 元子

5月15日、まほろば2階での「しゃぼん玉先生の知ってるようで知らない石けんの話」に参加いたしました。

今回改めてシャボン玉石けんについて詳しく知る機会を得て、創業100年以上というのにまず驚き、そしてこれまでの商品開発へ努力を知り、また健康のことや地球環境への理念の深さを知り、大変に心動かされました。ここで少し報告させていただきます。

●確かに「知らなかった石けんの話」

まほろばでお買い物のお客様は、少しはご存知かと思える「合成洗剤」のこと…日本では大手3大洗剤メーカーの派手なTVや雑誌コマーシャルを一日に何度か目にするでしょう。「輝く白さ!」「繊維の奥まで汚れをスッカリ落とす!」…、見た人の脳裏にインプットされる合成洗剤のコマーシャル。日本の市場の90%以上をこの三大メーカーが牛耳っており、広告宣伝費になんと500億円!!は掛けているとか。

「無添加洗剤で白い衣類を洗っていくと白いモノはだんだん黄ばむ」という話は聞きます。これは真っ白にしていた「蛍光増白剤」が石けんでは取れていくからです。しかし合成洗剤には、この「**蛍光増白剤**」が配合されており、衣類を白くする。これを「ブラックライト」で照らすと青白く光り、肌に入ると健康にもよくない状況となると言われています。

●実はここまで恐ろしい合成洗剤! 驚いたのは魚「あじ」の実験!

ここで合成石けん
と天然石
けんの実
験のフィ
ルムを見



「水を入れた大きな釜」→「天然油脂と苛性ソーダ（苛性カリ）を混ぜる」→「反応!!!」→「1週間熟成」→出来上り

「釜炊き10年」と言われる釜炊き職人さんは、ぐつぐつ煮えた石けんの素を「舐めて!!」石けんの出来具合、反応具合を確かめる。これぞ職人技! 肌に優しい天然の保湿成分グリセリンを含んだ石けんは「舐めて」も安全、これは身体に悪いわけがありません。

※大手メーカーの石けんの製造法は「中和法」といいます。「油脂」→「グリセリンを除く」→「脂肪酸だけにする」→「苛性ソーダを加える」→「4時間から5時間で反応」→「石けんができる」。

合成洗剤の製造法は全く別です。「石油からアルキルベンゼン・アルファオレフィン・高級アルコールといった合成界面活性剤の原料を作る」→「硫酸化（スルホン化）や中和といった複雑な化学合成を経て」→「合成界面活性剤を作る」→「ビルダー（助剤）などを添加」→「合成洗剤」ができる。

最近では「植物由来」といったふれこみで、天然油脂を原料にした合成洗剤も存在しますが、裏表示を見れば一目瞭然、石油由来の合成洗剤と同様に複雑な化学合成を繰り返し、最終的には自然界には存在しない「合成界面活性剤を成分」としています。

「自然派風の…なんちゃってえ〜」なんですね。

洗濯をした衣類、首回り、腰回り、背中、衣類が一番密着しやすいところに、洗剤成分が残っていて、汗に溶け出て肌にしみ込んでくる…。毎日、密着して身に着ける服はどれで洗いましょうか。

●裏表示をもっと知っておこう!

最近では食品に関しては「裏の表示」をちゃんと見る方は増えていますが、洗剤も裏表示を見たことがありますか?

裏表示に「LAS」「PO」または「POE」などで書いてますが、これはポリオキシエチレンアルキルエーテル、アルキルエーテル硫酸エステルナトリウム（通称「ラウレス硫酸Na」）のことです。

そしてポリオキシエチレンアルキルエーテルは水性生物への毒性が強く、細胞のタンパク質を変成させる作用があるとまで言われています。（ああ〜!!あの苦しんだアジだ）ところが…これを使った商品は実に多く、合成洗剤の定番と言われる成分です。アルキルエーテル硫酸エステルナトリウムは（通称「ラウレス硫酸Na」）、最近の合成洗剤や化粧品に多く使われています。

- ・LAS→直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム
- ・ABS→アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム
- ・AES→アルキルエーテル硫酸エステルナトリウム

せていただきました。水の入ったガラスの水槽2個。

両方の水槽に魚の「アジ」3匹づついれました。

次に片方の水槽には「合成洗剤」、もう片方には同じ濃度の「無添加石けん」を投入。

「無添加石けん」の水槽は、石けん成分で水が白濁したのですが、「アジ」は至って元気にスイスイと泳ぐ。ところが「合成洗剤」の入った方の水槽、「アジ」のものがきしみ方がすごい!! バタバタ暴れ、水面をジャンプ、そして3分後には3匹の「アジ」は死んでしまいました。しかもアジのエラから入った合成洗剤の「細胞の破壊力」はすごく、死んだアジの口から血をにじませ、みるみる身体が崩れる…衝撃的!!

最近ではキャンプ場の洗い場で「合成洗剤を使用しないでください」という張り紙表示があるのは、そういうことだったんですね。合成洗剤の脅威!! 自然破壊に手を貸しているようなもの、そして身体にもいいわけがありませんね。では、なぜこういう合成洗剤が使われるようになったのか…。

●洗剤の歴史は古くて・・・

「石けん」の歴史は古くて1万年前。

動物を焼いた時に滴り落ちた油脂と木の灰（アルカリ）が混ざって出来たもので、「汚れを落とす土」として発見されたのが石けんのはじまりだとか。日本には安土・桃山時代にスペイン、ポルトガル人によって持ち込まれたと言われています。

一方、「合成洗剤」は、第一次大戦中にドイツが開発したというのが通説。兵服を洗う需要が増えたのに、油脂不足で「石けん」の調達が困難になり、石油から作る「合成洗剤」が開発されたとか。それが、戦後の日本に入り、高度経済成長期に洗濯機の普及もあって、一気に広がっていったそうです。

昔は、日本もどこの家庭も洗濯は洗濯板と石けん、ゴシゴシ洗っていた…すべてが天然な時代でした。そして「石けん」と「合成洗剤」、「洗う」目的は同じでも似ても似つかぬ成分から出来ているのです。

●舐めても安全な石けん?!!

石けんは、天然油脂（もしくは天然油脂が元の脂肪酸）を原料に、「ケン化法」又は「中和法」という製法で作られます。

シャボン玉石けんの製造は「ケン化法」と呼ばれる伝統的な釜炊き製法で、熟練の職人が炊き上げて作るそうです。

天然油脂（もしくは脂肪酸） + 苛性ソーダ 苛性カリ → 石けん

洗濯用製品の場合

台所用製品の場合

●シャボン玉石けん 粉石けんスノール		(例)合成洗剤	
品名	洗濯用石けん	品名	洗濯用合成洗剤
液性	弱アルカリ性	液性	弱アルカリ性
成分	純石けん分(99%脂肪酸ナトリウム)	成分	界面活性剤(22%:直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム、ポリオキシエチレンアルキルエーテル)、アルカリ剤、水軟化剤、蛍光増白剤、酵素
品名は「洗濯用石けん」		品名は「洗濯用合成洗剤」	

●シャボン玉石けん 台所用せっけん液体タイプ		(例)合成洗剤	
品名	台所用石けん	品名	台所用合成洗剤
液性	弱アルカリ性	液性	中性
成分	純石けん分(23%脂肪酸カリウム)	成分	界面活性剤(31%:アルキルエーテル硫酸エステルナトリウム、アルキルアミンオキシド、ポリオキシエチレンアルキルエーテル)、安定化剤
品名は「台所用石けん」		品名は「台所用合成洗剤」	

- ・SLS→ラウリル硫酸ナトリウム
- ・PG→プロピレングリコール 等々・・・

カタカナもややっこしくて難しいけど、さらにもアルファベットで短縮され、どんな成分かわからないようにしているような気もしてくる…どう考えても。

製法にも時間をかけて作られているシャボン玉さんの洗剤の裏表示は「カリ石ケン素地」、もしくは「純石けん分（脂肪酸ナトリウム、脂肪酸カリウム）」…のみ。

●創業100年のシャボン玉さんの話。

シャボン玉さんは1910年森田範次郎商店として創業。北九州の石炭の街だったので、炭鉱夫の衣類に汚れを落とすために洗剤が必要とされ、1961年「合成洗剤販売会社」になりました。ところが1961年から毎年、前社長は身体に湿疹が出来るようになり、1971年に国鉄から「合成洗剤で機関車を洗うと、どうしてもサビが出る。天然油脂で作る純度の高い石けんで試してみたい」との依頼を受け、高純度の粉石けんの試作品を自宅で洗濯と浴用に使ったところ、嘘のように湿疹が治ったことから、「身体に悪いとわかった商品」を売るわけにはいかない」と一大決心し、合成洗剤から無添加石けん製造販売に変えたそうです。

しかし、経営は急に悪化で従業員も100人いたのが5人に減少、8000万から78万に利益が減少して17年間赤字続き。それでもかたくなに「安心できる商品を」の信念で続いた会社だそうです。今や健康志向が広まってきて、名前と商品が知られるようになりました。

さて国民の3人に1人は敏感肌、老人の4人に一人は肌にトラブルがあると言われています。

天然石けんに変えたらお肌のトラブルが緩和されたという声も聴きます。天然の石けん成分は、川に流れると魚や微生物の「餌」になってしまうとの説明、あの「アジ」の実験を見て「なるほど」と思いました。これこそ人にも地球にも優しい石けん。たくさんの方がこれに気づき、本当の天然の石けんを使っていたらいいと思います。